HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	クリスチャンの特攻隊員 ： 林市造の手記を読む
Author(s)	石川, 明人
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 122, 右1-右35
Issue Date	2007-07-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/27972
Type	bulletin (article)
File Information	CulturalScience122-r1.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

クリスチャンの特攻隊員
――林市造の手記を読む――

石川明人

「お母さん、でも私の様なものが特攻隊員となれたことを喜んで下さいね。死んでも立派な戦死だし、キリスト教によれる私達ですからね。
でも、お母さん、やはり悲しいですね。悲しいときは泣いて下さい。私もかなしいから一緒に泣きましょう。そして思う存分ないたら喜びましょう。
私は讃美歌をうたいながら敵艦につっこみます」

林市造の母への手紙より[1]

はじめに

大正一一年(一九二二年)、林市造は福岡市に生まれた。早くに父を病気で亡くすものの、母と姉そして親戚たちにかわいがられながら、スポーツ好きの明るい青年に成長していった。彼は四人姉弟の長男として将来を期待され、福岡高等学校をへて京都帝国大学経済学部へ進学する。しかしわずか一年で文科系学生の徴兵猶予が廃止され、いわゆる学徒出陣により佐世保第二海兵団に入団、後に海軍第一四期飛行予備学生となる。だが戦況はすでに悪化の一途をたどっており、市造は戦闘機搭乗員として速成訓練を受け、ついには神風特別攻撃隊に編入される。そして終戦まであと四ヶ月というところ、昭和二〇年四月一二日、市造は二五〇キロ爆弾を固定した零式艦上戦闘機に乗り込み、鹿児島県の基地を離陸して、与論島東方で連合軍の機動部隊に突入、戦死した。二三歳だった。

本稿は宗教学的関心から、この林市造という一人の特攻隊員が残した日記や手紙について、特に彼のキリスト教信仰に注目しながら考察していくものである。

「特攻」そのものについては、その歴史的事実を整理するだけでも膨大な資料に取り組む必要がある。またそれに関わった人間、つまり特攻を命じた側と命じられた側や、特攻隊員になったものの終戦になり出撃することなく生き残った人などの手記にも多くのものがある。本稿は、特攻それ自体を総括してこの「軍事作戦」のあり方について価値判断を下そうとするものではなく、あくまで林市造というキリスト教徒の特攻隊員とその家族や知人の目を通して、戦場という極限状況における「信仰」について考えることを目的とする。

以下では、まず市造のおかれていた当時の状況について簡単に整理し、そして次に市造の日記や手紙のテキストがもつ問題について必要な事柄をまとめる。その上で実際に市造の残した文章を読んでいき、家族や知人の目から見た市造について触れながら、彼における信仰や死の問題について考察していくことにしたい。

一　神風特攻隊第二七生隊（しちしょうたい）と市造

「神風」という言葉はいまでは「特攻」とほぼ同義語として用いられており、Kamikazeは外国でもよく知られた日本語の一つにさえなっている。しばしば一部のムスリムによる自爆テロが日本のKamikazeと同類のものとして語られ、またsuicide attackと翻訳ないし説明されることもある。日本軍の「特攻」がいわゆる「自爆テロ」とどう違うのか、また「特攻」をsuicide attackと訳すことにはどのような問題があるのかという点についてはきちんと答えられねばならないが、それについて正確に説明することはすなわち「特攻」そのものを論じることになり、軍事的事柄、社会的状況、そして日本と欧米の価値観や思想等に関して多くの点に触れねばならなくなる。またこれは単に戦史・軍事史のテーマとしてだけではなく、社会学、心理学、倫理学、死生学など様々な観点からも分析されうるテーマであるだろう。だがすでに述べたように、本稿はあくまで林市造の遺稿を読むことを目的としている。特攻そのものに関してはすでに多くの本がでているのでさしあたってはそちらを参照していただくとして、[2]ここでは市造の部隊に関する基本的な背景のみを簡単に述べておく。

市造の出撃は戦争末期の「菊水二号作戦」の一環であった。菊水作戦とは連合軍の沖縄への侵攻を阻止することを

主な目的としたもので、この作戦名は当時天皇に対する最大の忠臣とされた楠木正成の家紋に由来する。海軍で菊水作戦という名で呼ばれたこれは、陸軍では単に航空総攻撃と呼ばれた。この菊水作戦は第一号から第十号まで二ヶ月以上にわたって実施された。「菊水一号作戦」（陸軍では「第一次航空総攻撃」）は、昭和二〇年四月六日から七日にかけておこなわれ、陸海軍あわせて約三〇〇の特攻機が沖縄周辺のアメリカ艦隊に突入した。四六センチ砲を九門もつ世界最大の戦艦大和が「一億総特攻のさきがけ」として約三〇〇〇名の乗組員とともに海に沈んだのも、この四月七日である（天一号作戦）。そしてそれから五日後、四月一二日から一五日、再度の大規模な特攻作戦として、海軍は「菊水二号作戦」を、陸軍は「第二次航空総攻撃」をおこなった。市造はこの作戦の初日に出撃した数百人のパイロットのうちの一人だったのである。

海軍の「特攻」そのものは昭和一九年の一〇月末からはじまっており、市造が特攻隊員となったのはその翌二〇年の二月二二日であった。二月二一日午後二時ごろ、当時市造がいた朝鮮の元山航空隊に、本部から特別攻撃隊の訓練を開始せよという命令の電報が入った。その翌日には概ね隊員が確定している。しばしば特攻に関してはそれが命令だったのか志願だったのかという議論がなされる。事情は陸海軍やまたそれぞれの部隊によって、あるいは時期によって様々であり、また航空特攻、水上特攻、空挺特攻、回天（いわゆる人間魚雷）、伏龍（潜水具を着用しての対舟艇特攻）など様々な種類の特攻の全てを一言でまとめることはできない。だが市造がいた海軍航空隊の元山基地においては、特攻訓練のための新編成は、最終的には学生隊の編成替えとして発表されたようである。[3] 市造は当時学生隊第五分隊にいたが、その第五分隊六五名は第五、第六、第九の三分隊に分割され、そのうち第五と第六の二分隊が特攻訓練の分隊となった。市造はその第六分隊に振り分けられたと見られる。神風特別攻撃隊というのは海軍の航空機によ

る体当り攻撃部隊につけられた名称であり、同じ航空機による特攻でも陸軍のそれを「神風特攻隊」とはいわない。また海軍の神風特攻隊でもその中でさらに様々な隊名がつけられている。たとえば神風特攻第一号とされている関行男大尉が率いた部隊は敷島隊と名づけられ、他にも大和隊、山桜隊、朝日隊などの隊名があった。市造の第六分隊は後に「第二七生隊（しちしょうたい）」と命名された。第五分隊は「第一七生隊」となり、そちらが先に菊水一号作戦で出撃することになる。つまりこの二月の編成で命の長さに五日間の差が生まれたことになる（元山基地における七生隊の編成プロセスについては、森岡清美が詳しく整理している）[4]。

特攻隊の隊名および作戦・戦果等はいくつかの本によって一覧表などのかたちでまとめられている（ただしそれらのデータには異同も散見されるため、参照する場合には複数の資料を照らし合わせる必要がある）[5]。それらによれば、市造の第二七生隊は、彼を含めて一七名の部隊であった。特攻作戦には旧型機や練習機まで用いられることがあったが、第二七生隊の使用機は零式艦上戦闘機（ゼロ戦）の二一型もしくは五二型だったので[6]、市造が搭乗したのもそのどちらかだったと思われる。

市造ら第二七生隊員たちが仲間に最後の別れをして鹿児島県鹿屋の基地[7]を離陸したのは、昭和二〇年四月一二日の一三時四分であった。それから約二時間の飛行の後、彼らは与論島東方七〇浬付近の海上で、とうとう敵の機動部隊を発見する。鹿屋の戦闘指揮所は一五時一四分から二五分にかけて、第二七生隊からあいついで「我敵艦ニ必中突入中」の無電を受信した。突入した相手はアメリカ海軍の高速空母機動部隊（第五艦隊）および上陸支援部隊であった。第二七生隊一七名、無論全員未帰還である。

述べたようにこれは菊水二号作戦の一部であり、この四月一二日に航空特攻をしたのは市造の部隊一七機だけでは

ない。この日は午後から夕方にかけて、陸海軍あわせて二三もの部隊、約一七〇機が体当り攻撃をした壮絶な一日だったのである。相手は空母を有する機動部隊である。待ち受けるアメリカの戦闘機は、重い爆弾を搭載して動きの鈍くなった日本軍の特攻機に容赦なく機銃をあびせた。それらをかいくぐってどうにか船団に接近することができたとしても、それら艦船からの対空砲火も凄まじかった。周囲に電波を発しながら飛び半径一五メートル以内にものがあると爆発するVT信管付きの砲弾と嵐のような機銃弾は、突入しようとする特攻機の翼をもぎ、また風防や機体側面を破ってパイロットの体を貫いた。多くの機は空中で破壊され、あるいは燃料タンクやエンジンに被弾して炎や煙をはきながら海面に激突し、巨大な水柱をたてた。アメリカ軍側の記録によれば、この戦闘で沈没したのは、駆逐艦マナート・L・エーブル、大型上陸支援艇三三号の二隻で、他に駆逐艦、上陸支援艦、掃海艇など一六隻が大小の損害を被ったとされている。

市造がこの海でどのような最期をとげたのかは誰にもわからない。

市造の母まつゑに息子の戦死が知らされたのでさえ、それから一ヶ月以上後、五月の下旬になってからのことだったのである。

二　市造の日記と手紙のテキストに関する問題

では次に市造の日記や手紙のテキストがもつ問題について述べておく。

市造の遺稿テキストとして基本となるのは、彼の姉である加賀博子の編集による『林市造遺稿集　日記・母への手

紙　日なり楯なり』（櫂歌書房、平成七年、以下『日なり楯なり』と略記する）、および『特攻隊員林市造　ある遺書』（湯川達典著、櫂歌書房、平成五年）である。市造が母に宛てて書いた手紙は他の戦没学徒遺稿集の類にもおさめられている。現在でも入手しやすいものとしては、『きけわだつみのこえ』（日本戦没学生記念会編、岩波書店、平成七年）、『あゝ同期の桜――かえらざる青春の手記――』（海軍飛行予備学生第一四期会編、光人社、平成一五年）などが挙げられるが、他にもアメリカで刊行された *Letters to Mother*, (ed. by Charles van Doren, Channel Press, 1959) にも収録されており、また特攻隊員の遺書を朗読したCD『海軍特別攻撃隊　遺書』（真継不二夫監修、日本クラウン、平成四年）にも録音されている。

ただしこれらのテキストによって市造の手紙を読むときには注意が必要となる。大貫恵美子や森岡清美も指摘しているように、[8] 戦没学徒の手記を集めた本の多くには、しばしば語句の写し間違いや、断りのない勝手な省略などが散見されるからである。最終的に正確なテキストを確定するには日記や手紙それぞれの現物を手に入れる必要があるが、現時点ではそのような作業をおこなう機会が得られなかったので、ここでは姉の加賀博子編集による遺稿集『日なり楯なり』を正確なテキストと仮定したうえでその他のテキストを検討することにしたい。

まず戦没学徒の遺稿集として最も有名な『きけわだつみのこえ』をみてみよう。これが最初に出版されたのは昭和二四年であり、現在にいたるまで多くの読者を獲得している。しかしこの本は、必ずしも戦没学徒の手紙や手記を原文に忠実に掲載したものとはなっていない。また「軍国主義的な内容は除く」「軍国主義的表現（八紘一宇、七生報国など）は削除する」「その時代に対する対抗の表現が含まれている遺稿を尊重する」などのことが意識されながら各手記の選考がなされた。[9] その背景にはＧＨＱの検閲や、敗戦から四年目の用紙不足ゆえに出版社から三三〇頁以内に抑

えてほしいという枠がはめられていたことなどもあるが、いずれにしても、集められた戦没学徒の遺稿は恣意的に選別され、また勝手な省略や、一部には創作にも近い書き換えまであり、全てが純粋に手記の原文に忠実なのではない。[10] 日本戦没学生記念会（わだつみ会）は平成七年に『新版　きけわだつみのこえ』（以下『新版』と略記する）を出し、「新版刊行にあたって」のなかで、「新版の特徴の第一は、遺稿本文の確定、いわゆるテキスト・クリティークを厳密に行ったことである」と述べている。確かに一部の誤り等は修正されたものの、しかし依然として厳密な「テキスト・クリティーク」をへたものであるとはいいがたい状態にある。[11]

市造の手紙はこの『新版』（岩波文庫）では、三四三―三四七頁にかけて掲載されている。だがこれを『日なり楯なり』に収録されている同じ手紙の文章と照らし合わせてみると、『新版』では大きく二箇所がカットされており、それは全体のおよそ五分の二にあたることが判明する。まず一つ目の箇所はこの手紙の中間にあたる次の部分である。

「お母さん、私は男です。日本に生まれた男はみんな国を負うて死んでゆく男です。有難いことに、お母さん、お母さんは私を立派な男に生んで育てて下さいました。情熱を人一倍にさずけて下さいました。お母さんのつくって下さいました私は、この秋（とき）には敵の中に飛びこんでゆくより外に手をしらないのです。

立派に敵の空母をしずめてみせます。人に威張って下さい。

大分気を張ってかきましたが、私がうけた学問も私が正しい時にかく感ずるのだと教えています」[12]

この部分がカットされたのは、おそらく「立派に敵の空母をしずめてみせます」というあたりが「軍国主義的」だ

とみなされたためではないかと思われる。特攻隊への編入が決まった市造にとって、女手ひとつで育ててくれた母へ「日本に生まれた男」として「立派に敵の空母をしずめてみせます。人に威張ってください」と言い残すことは、単なる軍国主義的態度ではなく、残された母の悲しみが少しでも和らぐようにするための気遣いだったのではないだろうかとも思われるが、とにかくこの部分は完全に削除されてしまっている。

二つ目の省略箇所は、この手紙の後半部分である。こちらの省略箇所には明確な「軍国主義的表現」はほとんど見られない。あえていうならば、そこには「お母さん、でも私の様なものが特攻隊員となれたことを喜んでくださいね。死んでも立派な戦死だし、キリスト教によれる私達ですからね」という一文が含まれるので、ひょっとするとここに特攻や戦死の肯定というニュアンスを読み取られてカットされてしまったのかもしれないが、あるいは単に紙面を節約するためだけの省略だったのかもしれない。

本稿の冒頭にあげた一節は、正にこのカットされた後半部分の中の一部である。したがって、市造の手紙自体は『きけわだつみのこえ』が出版された昭和二四年から知られていたが、この本稿冒頭の引用部分は『日なり楯なり』が出版された平成七年に初めて多くの人の目に触れるようになったのである。[13]

さてこの岩波文庫版『新版』が出る前の『旧版』では、文章そのものの写し間違いがあった。具体的には、市造がパイロットになることに反対していた母を思いながら、「母ちゃんのいわれる様にした方がよかったかなあとも思います」と書いている箇所の「した方がよかったかなあ」という部分を、「した方がよかったなあ」としてしまっているのである。これでは文意が大きく変わってしまうことになる。[14] こうした点が『新版』になって訂正されたのであるから、『新版』が全く無意味だというわけではない。しかしそれでもオリジナルと全くと同じになったわけではない。終戦直

後の用紙不足問題は、『新版』が出た平成七年にはすでに解消されているはずであるが、依然として編者による省略は維持されている。この『新版』の「凡例」によれば、文中の「……」（点が一二個）は編者による省略で、「……」（点が六個）は手記を書いた学徒兵自身の手による表記だとして区別されている。だが本来の「…」と編者の判断による省略とを同じ記号の点の数だけで区別するという表記の仕方は、実際に読書する上では決して分りやすいものではない。多くの読者は恣意的な省略がなされていることをあまり意識せずに、これが全文だと思って読んでしまうのではないかと思われる。カットされた部分については、はっきりと「中略」「後略」などの表記がなされるべきであろう。また、『新版』では漢字からひらがなへの書き換え、また逆にひらがなから漢字への書き換えが多くなされているが（これは「凡例」でも断りが述べられている）、市造のこの手紙では、それに加えて、本来句読点がないところにそれが挿入されている部分が三箇所あり、また改行箇所が『日なり楯なり』と異なっている部分も六箇所にのぼる。

『きけわだつみのこえ』にはいっているのと同じ手紙は、『あゝ同期の桜――かえらざる青春の手記――』（海軍飛行予備学生第一四期会編、光人社、平成一五年）にも収録されている。この本における文章は、基本的には岩波文庫版『新版』とほぼ同じように見える。だがよく見ると、ここでは『日なり楯なり』にはない句読点が三九も挿入されてしまっている。また「母チャン、母チャンが私にこうせよと云われた事に反対して、とうとうここまで来てしまいました」という文章の「とうとう」という部分が欠落していたり、「結婚の話、なんだかあんな人々をからかったみたいですが、こんな事情ですからよろしくお断りして下さい」という文章の「あんな人々」の「あんな」も抜けている。また、「私もいつも傍に居ますから、楽しく送って下さい」という箇所は、「楽しく日を送ってください」となっており、無いはずの「日を」という言葉が付け加えられているのである。また『新版』同様に改行箇所も勝手に変更されてい

るなど、文意をねじ曲げているというわけではないが不注意な写し間違いといわざるをえない箇所が多い。そして何よりも最も大きな問題は、この本では省略箇所について一切の断り書きがなされていない点である。岩波文庫版『新版』では編集者側によってカットされた箇所のあるということは、一応「……」の表記によってわかるが、この『あゝ同期の桜――かえらざる青春の手記――』ではそうした表記が一切ない。つまりあたかもこれが市造の手紙の全文であるかのようになっているのである。

チャールズ・ファン・ドレン編集による *Letters to Mother* (Channel Press, 1959) にも同じ手紙が収録されている。この本は有名な科学者、哲学者、芸術家、政治家など様々な人物が母親に宛てて書いた手紙を集めた本で、そのなかで唯一の日本人として市造の手紙がおさめられているのである。市造は京都帝国大学在学中に徴兵されるが、この本では Tokio University の学生だったと紹介されてしまっている。この紹介欄の最後は "Hayashi was a Christian" と締めくくられており、彼がカミカゼのパイロットであったにもかかわらずキリスト教徒でもあったという点が編者の関心をひいたのではないかと思われる。

この本においてもやはり『新版』や『あゝ同期の桜』と同様の省略箇所があり、しかも一部省略した箇所があることが全く述べられていないので、これが手紙の全文であるかのように見えてしまっている。おそらく既に出版されていた何らかの戦没学徒遺稿集からそのまま英訳したのではないかと思われる。段落の分け方が『日なり楯なり』とも『新版』とも『あゝ同期の桜』とも異なっており、またかなり意訳されたものとなっている。例えばこの手紙の冒頭で市造が次のように書いた箇所がある。

クリスチャンの特攻隊員

「親思う心にまさる親心
今日のおとずれ何ときくらむ
この歌がしみじみと思われます[15]」

この部分がどのように訳されているかというと“You love me more than I will ever be able to love you. What will you think of this letter? I am desperately sorry”[16]となっているのである。「親思う〜」という吉田松陰の歌をどのように訳すかは判断が分かれるであろうが、いずれにしてもこの英訳では、まるでこの歌が市造本人の言葉であるように読めてしまい、そもそも歌であるということさえわからないであろう。そして“What will you think of this letter? I am desperately sorry”の“letter”は市造のこの手紙そのものをさしているようにも解釈されてしまう。このようにこの本に収録された英訳も、やはり本来のテキストに完全に忠実であるとはいえない。

そしてまた、もっとも信頼できるはずの『日なり楯なり』では表紙に引用間違いがある。述べたように、「私は讃美歌をうたいながら敵艦につっこみます」という一文は岩波文庫の『新版』でも『あゝ同期の桜』でもカットされており、この『日なり楯なり』ではじめて一般に知られるようになった大事な部分である。そしてまさにこの一文がこの『日なり楯なり』の表紙デザインの一部として印刷されているのだが、しかしそこでは、「私は讃美歌をうたひながら戦艦につっこみます」となってしまっているのである。同じ本の中で仮名づかいが一貫していないのはともかく、「敵艦」と「戦艦」では意味が違う。戦艦とは軍艦の中の一つの種類をさす用語であり、つまりは戦闘艦（battleship）であって、当時の日本軍でいえば大和や武蔵などのような大砲と厚い装甲を備えた軍艦である。市造はこの同じ手紙の

なかで「立派に敵の空母をしずめてみせます」と述べている以上、撃沈しようとする相手は、少なくとも彼の頭の中では空母であると考えるのが自然である。当時の日本軍としても、航空機による特攻作戦の第一の標的は空母であるとされていた。海軍の艦船を「戦艦」と総称するケースもないわけではないが、しかし「戦艦」とはあくまで大砲を主兵装とし堅牢な装甲をもつ軍艦のことであるから、それはこの語の正しい用法ではない。海軍少尉であった市造自身がここで「戦艦」という言葉を使ったとは考えにくいため、これは「敵艦」となっている本文の記述の方が正しく、表紙の下部に印刷された引用の方が写し間違いであると推測される。[17]

このように、市造の手紙はさほど長いものではないにもかかわらず、これまでの様々な遺稿集では必ずしも正確に引用や収録がなされていない。悪意は無いにしても不注意な写し間違いが少なくない。[18] ただ市造の場合はこれでもまだましなほうで、ある戦没学徒の手記にいたっては、勝手な創作ともいえるような書き換えがなされてしまっているケースさえある。人が死を前にして懸命に書き残した遺書が、しかも特攻という異常な死を前にして一〇代や二〇代の若者が必死に書いた文章が、断りも無く一部省略されていたり、別々の日に書いた文章が勝手に切り貼りされてあたかも一つの文章のようにされていたりするなど、信じられないほど雑に編集されていることがある。これまで戦没学徒の手記というものは、平和の大切さや戦争の悲惨さを、もっぱら人々の情緒にうったえるための効果的な手段として利用されてきただけなのかもしれない。もちろん中には戦没学徒の手記を原文に忠実に編集していくことに尽力した人もいる。だが多くの場合は、歴史的資料として厳密に扱おうという意識が非常に低いまま編集されて現在にいたっているのである。すでに戦後長い時間がたってしまったが、これからもあの戦争の様々な側面について厳密に検証していくとするならば、戦没学徒の手記といった基本的な資料についても根本的に編集作業をし直すことが求めら

れるであろう。

三　市造の日記と手紙におけるキリスト教

前置きが長くなったが、ではこれから市造の日記や手紙を見ていくことにしたい。

まず、市造の日記には自らによって「日なり楯なり」というタイトルがつけられている。これは旧約聖書「詩篇」第八四篇一一節の言葉である。一節前から引用すると次のとおりである。「なんぢの大庭にすまふ一日は千日にもまされり　われは悪の幕屋にをらんよりは　寧ろわが神のいへの門守とならんことを欲ふなり　そは神エホバは日なり盾なり　エホバは恩とえいくわうとをあたへ直くあゆむものに善物をこばみたまふことなし」（日本聖書協会、文語訳）。「日なり楯なり」というタイトルの脇には「昭和二〇年正月」と書かれ、冒頭には「珍しくも新しき手帳貰えるに依り、日記をはじむ」[19]とある。どのような経緯で入手された手帳なのかは不明だが、この日記を書き始めたきっかけは偶然的なものだったと思われる。

遺稿集『日なり楯なり』には、この日記とその他の手紙がおさめられており、その全体をとおして、市造が信仰を通して特攻による死を受け入れようと葛藤していた様子をうかがい知ることができる。まず特攻隊編入が決まった翌日に書かれた日記の中には次のような一文がある。

「すべては神のみむねであると考えてくると私の心はのびやかになる。神は母に対しても私に対しても悪しくなさ

れるはずがない。私達一家への幸福は必ず与えられる[20]」

この日の日記の冒頭には「死があんなに怖ろしかったのに、私達は既に与えられてしまった[21]」とあり、戦闘機パイロットとしてある程度の覚悟はできていたとはいえ、実際に目の前に突きつけられた「死」の現実にはさすがにとまどったのだと思われる。市造は「大君の辺に死ぬ願い」がまだ自分の心からのものとはいいがたいとも告白しているが、同時に「私は死の恐怖が私の生活をみだすことを恐れなくてはならない[22]」とも述べており、自らの運命を受け入れようとするその様子には禁欲的な姿勢さえ感じられる。自分ではどうにもできないこの運命は「私にさだめられたこと[23]」だというのである。しかし市造は単なる悲劇としてその運命に身をまかせようとするわけではない。「すべては神のみむねであると考えてくると私の心はのびやかになる」といっているように、彼はこの運命を、自分に敵対するような恐ろしい何者かによって無理やり与えられてしまったものとしてではなく、むしろ自らの信じる神に由来するものとして肯定的に捉えようとしているのである。それから約一週間後には次のようにも書いている。

「信仰者は彼に迫っていること乃至彼の敢てすることが人間的な計算によれば、彼の破滅となるに違いないことを知っている。だが彼は信ずるのである。彼は自分で如何にして救われるであろうかというようなことは、全然神に委せきりである。

ただ彼は神にとっては一切が可能であることをしる[24]」

こうした記述からは、市造が戦死に対する自らの主体性は維持しつつも、その究極的な意味については超越的なる存在に全てまかせて、自分自身は決して悲観や絶望に陥らないように努力しているという様子を読み取れるかもしれない。またこれは、自らの目を恐怖と苦痛の「死」に対してではなく、残された「生」に向けようとする姿勢でもあるだろう。次のような一文も、「死」を無理に肯定するのではなく、むしろ「生」を何かしら究極的なものへ差し出す佇まいであるようにも思われる。

「私は死を考えない方がよい。私は却って死を与えられた現在に於ては生を考えようと思う。生きようと思う。私は死を眼前に悠々たる態度をとるのでなしに、永遠に生きるものの道を辿ろう」[25]

この最後の「永遠に生きるものの道」というのは、彼の日記や手紙の全体を念頭に推測するならば、「信仰」ないしは「神」を念頭においた生き方に他ならないであろう。すでに死を与えられた身としては、確かに生への愛着を断ち切らねばならない。生への愛着とは、彼によれば、友人や家族といった人間関係への執着と享楽への思慕である。死を見つめながら、彼は「私は戦死に心惹かれる。だが考えてみるとそれは逃避でしかない」[26]とも述べている。死を与えられた今においては死を考えるのではなく、むしろ生を考えねばならない、と自らに言いきかせるのである。そして今この状態においてなお「生を考える」ことが可能であるとするならば、それはすなわち「永遠に生きるものの道を辿る」こと以外にありえなかったのであろう。

だがそう考えていてもやはり、戦闘機を操縦しての体当たりという壮絶な死を前にして、その瞬間までの何週間も

の時間を平静な精神状態で過ごすことは容易ではなかったであろう。出撃の約一ヶ月前の日記では、市造は訓練以外の時間に何をすればいいのかわからない自らの気持ちについて書いている。読書をするという気分でもなく、かといってカルタ遊びは頽廃的で嫌いだといい、しかし勉強をするという気力もない。すると彼は、こうした限られた時間内に楽しむことができるのは、空想や妄想にふけること以外にない気がするという。空想によって別個の自分を中心とした世界にたたずむことの「たのしさは格別」だというのである。[27] だがすぐに彼は次のように述べている。

「空想する人間は明らかに絶望の状態におかれている。絶望していない人間、死に至る病の真只中より抜けでた人間が私の理想であれば、空想より離れることは絶対に必要である。[28]」

この一文はやや唐突なものにも感じられるかもしれない。だがこの「絶望していない人間、死に至る病の真只中より抜けでた人間」というのは、キルケゴールの『死に至る病』を念頭において述べられているのである。『死に至る病』は市造の愛読書であり、『日なり楯なり』におさめられている他の手紙の中にもしばしば登場する書名である。市造は、空想する人間は明らかに絶望の状態におかれているというが、それがキルケゴールの文章のどの部分の解釈であるのかについてはあらためて検討が必要であろう。だがとにかく彼は、「空想」を楽しむことはキルケゴール的な「絶望」の状態を意味するものであり、自分はそうであってはならないと考えて、「空想」にひたる誘惑を強く振り払おうとしているのである。市造は別の日にも「絶望」について書いている。

「絶望、絶望は罪である」[29]

市造がこの一文にどのような思いをこめたのかを厳密に理解することは難しい。この一文の直前では、市造は、死を前にしていかに文字を書き記そうとも「文をかいても又文にだまされてしまいそうである。／人間はなんでこんな術を覚えたのか、弱い。／そして私はその弱さにこのんで沈んである」と述べている。また直後には、母親からの手紙が来ないこと、家族と会えないことを淋しがる文章が続いている。こうした文脈のあいだにあるこの「絶望、絶望は罪である」という一文は、前後の流れからすればやや浮いているようにも感じられる。だがあえて推測するならば、これは、自分の死の恐怖と、家族とくに母親への執着からくる苦悩のさなかで、決して悲しみにくれないようにしようとする彼なりの自戒の表現だったのかもしれない。

市造はキルケゴールの『死に至る病』について、福岡高校と京都帝国大学経済学部と続いての同級生であった吉田荘八へ宛てた手紙で次のように書いている。

「暇をみつけて「死に至る病」を読了した。人生に対する猛烈なファイトが湧いてくるのを感ずる。高校以来逃げて廻っていた俺だが」[30]

『死に至る病』は必ずしも読者に「人生に対する猛烈なファイト」を沸き立たせるような本ではないであろう。だがもしかしたら市造は、軍隊生活の中で再読した『死に至る病』をとおして、人間的な死を超越して永遠なるものに捉

えられるということの意味をあらためて悟ったのかもしれない。人間的には「死」はすべてのものの終わりである。だがキリスト教的には、「死」のなかにも無限の希望が存しうる。つまり信仰の次元においては定められた死でさえも「死に至る病」ではない。キルケゴールは『死に至る病』の緒論で次のように述べている。「キリスト者のみが死に至る病の何を意味するかを知っている。彼はキリスト者として自然人の知らない勇気を獲得した。彼はより怖るべきものを怖れることを学ぶことによってかかる勇気を獲得したのである」[31]。ここでキルケゴールのいう「勇気」を、市造は「人生に対する猛烈なファイト」と表現したのだと想像することも決してまとはずれではないのではないだろうか。

本稿の冒頭に挙げたのは、市造が元山基地から母親にあてた手紙の中の一節で、出撃を明後日にひかえて書かれたものである。『日なり楯なり』でも「元山基地より母への最後の手紙」と題がつけられている。しかし最後のつもりで書いたこの手紙を出した後に、その出撃は天候やその他の理由で延期され、実際の出撃と戦死はその約二週間後になったのであった。よってこの「最後の手紙」の後にも市造は何通もの手紙を書くことになるのだが、それでも市造自身はあくまでこれを「最後」のつもりでしたためたのである。「お母さん、とうとう悲しい便りを出さねばならないときがきました」という一文ではじまるこの手紙には、次のような一節がある。

「洗礼をうけた時、私は「死ね」といわれましたね。アメリカの弾にあたって死ぬより前に汝を救うものの御手によりて殺すのだといわれましたが、これを私は思い出して居ります。すべてが神様の御手にあるのです。神様の下にある私達には、この世の生死は問題になりませんね[32]」

この文章の前では、市造は立派に敵の空母を沈めてみせると宣言すると同時に、母親の傍に帰りたいという思いにかられることを吐露している。その直後に右の引用文がくるのである。ここには母への愛着と、そしてもう一度会いたいという思いがかなえられないことへの絶望が隠されている。母へ会いたいという思いがいっぱいになると市造は「神」にふれないではいられなくなるようにもみえる。「神様の下にある私達には、この世の生死は問題になりませんね」という一文の背後にあるのは、自らの「死」への恐怖と、母ともう会えないということの悲しみであろう。最愛の母と会えないまま死ににいくことになる。しかしこの運命を恨んだりせずに、むしろ信仰をとおしてなんとかこれを肯定的に受け入れようとする懸命な思いが「神」への言及となって表れているのではないかと思われる。そう解釈できる根拠の一つとして、すぐ後に彼は次のようにも書いている。

「私はこの頃毎日聖書をよんでいます。よんでいると、お母さんの近くに居る気持ちがするからです」[33]

市造にとって信仰、聖書、あるいは神に関する事柄は、すべて母の存在と表裏一体であったといっても過言ではないであろう。キリスト教信仰において中心となるのは、いうまでもなく「神」ないしは「イエス・キリスト」である。だが市造の遺稿には直接的に神に語りかけるような文章はでてこないし、信仰のあり方それ自体についての煩悶や葛藤も明らかな形では見られない。市造はキルケゴールなどを読んではいるものの、神学的ないしは宗教哲学的に「信仰」や「死」の意味について自らの言葉で問いかけている様子は、少なくとも一連の日記や手紙においてはみられない。もちろん市造は敬虔なキリスト教徒であったが、死を前にした彼にとっては、信仰とはすなわち母を中心とした

家族との絆の根拠でもあったのではないだろうか。日記の中でも「私は私の母が信ずる神を信じているということはなんという強みだろう」[34]と述べている。彼にとって母はこの世において最も信頼し甘えることのできる存在であったと同時に、神的な次元への導き手でもあった。

「お母さん、でも私の様なものが特攻隊員となれたことを喜んでくださいね。死んでも立派な戦死だし、キリスト教によれる私達ですからね。

でも、お母さん、やはり悲しいですね。悲しいときは泣いて下さい。私もかなしいから一緒に泣きましょう。そして思う存分ないたら喜びましょう。

私は讃美歌をうたいながら敵艦につっこみます[35]」

母に「悲しいときは泣いて下さい」といいながらも、つづく「思う存分ないたら喜びましょう」という言葉は、単なるこの世的な思いやりではなく、自分の「生」と母親の「生」とにある神的な根拠を前提とした表現であるように感じられる。前の引用でも「すべてが神様の御手にあるのです」といっているように、市造は別れも悲しみも恐怖も、すべてを神にゆだねようとしているからである。

「私は讃美歌をうたいながら敵艦につっこみます」という言葉どおりに、特攻のまさにその瞬間に、市造が本当に讃美歌を口ずさんでいたのかどうかは誰にもわからない。それが彼の愛唱歌である讃美歌三三七番(「わが生けるは主にこそよれ、死ぬるもわが益、また幸なり…」)であったのかどうかも当然わからない。だが市造にとって信仰と母への

思いとが究極的には一つのものであったことを鑑みるなら、この四月一二日の午後、爆装零戦の操縦桿をにぎる彼が、エンジンの爆音と猛烈な対空砲火のただなかで口にした最後の「讃美歌」は、すなわち母に対する感謝と愛情の言葉であったかもしれないとも思われる。

元山基地からのこの「最後の手紙」を書いた後、市造は鹿児島県の鹿屋に移動する。鹿屋から母宛に書いた手紙は三通あるが、もちろんいずれも元山基地からの手紙と同様に自分の戦死を前提とした内容になっている。

「出撃の服装は飛行服に日の丸の鉢巻をしめて純白のマフラーをして義士の討入のようです。お母さんの、千人は右に萬人は左にたおるとも……のかいてある国旗も身につけてゆきます」[36]

この「千人は右に萬人は左にたおるとも」というのは、旧約聖書の「詩篇」第九一篇七節の言葉である。正確には、「千人はなんぢの左にたふれ萬人はなんぢの右にたふる　されどその災害はなんぢに近づくことなからん」（日本聖書協会、文語訳）という部分である。多くの者が何らかの災いによって倒れるような状況においても神はあなたを守ってくださる、という詩の一部であり、市造の母はこの一節を国旗に書いて彼に持たせたのである。市造はそれをもって出撃すると書いたすぐ後に、次のように続けている。

「必ず必中轟沈させてみせます。戦果の中の一隻は私です。最後まで周到に確実にやる決心です。お母さんが見て居られるに違いない、祈って居られるに違いないのですから安心して突入しますよ」[37]

同じ基地で市造よりも先に何人かの仲間が特攻出撃していったが、市造はそれを「何だか夢のよう」だという。昨日出撃していった人々がもう死んでいることになかなかリアリティを感じることができず、「なんだか又ひょっこりかえってくるような気がします」というのである。そこで彼は次のようにいう。

「お母さんも長らくあわなかったからそんな気がするでしょうね。でもあっさりあきらめてください。「死にし者は死にし者に葬らしめよ」です。後にたくさん人がいるのですから皆でたのしく暮して下さい。私達の中には、全然母一人子一人の者もいますよ」[38]

市造はいわゆる母子家庭で育てられたが、それでも二人の姉と弟がいた。自分の死が家族を悲しませることは十分に承知していたが、それでも母一人子一人の家族よりはましなのだから、少しでも明るく生きていって欲しいと願っているのである。「死にし者は死にし者に葬らしめよ」というのは新約聖書「マタイによる福音書」の八章二二節、あるいは「ルカによる福音書」の九章六〇節にあるイエスの言葉である。母に、死んでも自分のことをいつまでも悲しんではいけないということを、福音書のイエスの言葉を用いてでも説得したかったのであろう。

「敵の行動にぶり勝利は我にあります。私達がつっこむことにより、最後のとどめがさされましょう。うれしいです。我々にとりて「生くるはキリストなり死するも又益なり」です。これが痛切に思われます」[39]

この言葉の前半が果たして本当に市造の本音であるのかどうかはわからない。またこの後半の聖書からの引用もどのような意味で「痛切に思われ」るのか、厳密にはわからない。大貫恵美子も指摘しているように、市造の手記には軍国政府のイデオロギーを鵜呑みにしているような発言と、それとは全く異なる世界観や人生観が交差して現れ、それは彼がいかに悩んでいたかを示しているとも思われる。[40] だがいずれにしても市造が母宛の手紙の中で聖書の言葉を引用するのは、彼自身の信仰のあらわれであると同時に、母の悲しみを少しでもやわらげようとするための手段としてそうしているようにも思われる。あるいは、聖書の言葉をもちいて自分の考えや心情をつたえようとするところに、母に対する愛が宗教的な次元に根ざすものであることが表れていると解釈できるかもしれない。この手紙の最後に市造は次のようにいう。「市造は一足先に天国に参ります。天国に入れてもらえますかしら。お母さん祈ってください。お母さんが来られるところへ行かなくてはたまらないですから」。[41] 母が死後にいくのは天国であるという絶対の自信は、市造における母の位置づけを端的に示している。そして自分も母がやがていく天国にいけるように祈ってくれというのもまた、母への最後の甘えを信仰的に表現したものといえるだろう。

そしていよいよ、本当の特攻出撃の前日に書いた母への手紙の最後は、次のように締めくくられている。

「明日は確実に必死必中です。
お母さん、たいがいのことはかきましたね。
今日は学校のオルガンで友達と讃美歌を歌いましたよ」[42]

この「学校」というのは、特攻隊員の宿舎として使用していたものであると思われる。「今日は学校のオルガンで友達と讃美歌を歌いましたよ」という最後のこの言葉は、それを読む母にとっても、またそれを書いた市造にとっても、単なる事実報告以上の意味を持ちうる。この一文は、「明日は確実に必死必中」であるけれども、それでも今日はオルガンで讃美歌を歌うほど精神状態は穏やかであり、決して不安や恐怖によって取り乱したりはしていない、という心の内面を母に伝える。そして同時に、死の前日に讃美歌を歌ったということをしっかり文字に書くことで、自分は確かに神のそばにいる、すなわち母ともしっかりとつながっていることを自らあらためて実感し、深い安堵をえることができたのではないだろうか。

四　家族と友人のなかの市造とキリスト教

市造の短い人生において母まつゑの存在はきわめて大きなものであった。だがそれは父親が三二歳の若さで亡くなってしまったこととも切り離せない。

市造の父俊造は二六歳で島根農林の教頭となり、福岡師範、福岡農業教員養成所をへて、東京帝国大学農学部の助手となった。上京した俊造からは、福岡にいるまつゑや市造と姉たちに研究室の模様をスケッチした手紙などが送られてきて、その翌年には家族みんなで江ノ島へ遊びに行くことなどを約束をしていた。しかし、俊造は三二歳の初夏に急死してしまう。市造はその時まだ二歳であった。しばしば、若い兵士は死に際に母親の名前を叫ぶといわれる。そうした可能性は市造においても高いと思われるが、ただし彼の場合はもの心がつくまえに父を亡くしているのであ

る。市造の手記に母への思いが極めて強く表れていることは、彼の家庭環境も念頭に入れて理解されるべきであろう。

父親を亡くした林家の生活は楽ではなかったが、母まつゑは、農村の文明開化を念願した夫俊造の遺志をついで、村の小学校の補習科などで農民の文化向上に孤軍奮闘した。女生徒の裁縫と補習科を一人で受け持ち、百姓に学問はいらないという風潮の中で、補習科の生徒にも女学校卒業程度の教養は身につけさせようと頑張った。昼間は裁縫、手芸、家事、生花などの授業をめいっぱいやり、ようやく家族そろって夕食を済ませると、今度はもめごとの仲裁や生徒の縁談などを手伝い、家に居れば居たで来客が多かったらしい。そんな母まつゑの人生を、次女の博子は「半生を夫に捧げ、子に捧げ、生徒にも捧げた」[43]と評している。

まつゑは夫俊造に導かれてクリスチャンとなったのだが、俊造は内村鑑三の影響を受けてクリスチャンになったらしい。[44]まつゑは夫の死後も、四人の子供を信仰によって育てた。そんなまつゑの精神的な支えとなったのは、津屋崎教会の桑原牧師であった。桑原牧師はいつも和服を着て古武士の風格があったというが、やさしく穏やかで宣教師とも会話のできる教養人であったという。市造は福岡市荒戸にあったホーリネス教会で幼児洗礼を受け、高等学校のときにあらためて受洗した。

博子の回想によれば、家庭内において食前には「日々の糧」という祈祷文を読みあったり、聖書を一章ずつ読んだこともあったという。母が最初に博子に買ってくれた本は、『天路歴程』だった。母のもっていた聖歌集の扉には「エホバ与えエホバ取り給う。エホバの聖名はほむべきかな」と記されていたという。この聖句は旧約聖書「ヨブ記」一章二一節の言葉で、しばしば葬儀などでも読みあげられる箇所だが、これは若くして夫を失った彼女の心境なのか、あるいはやがて特攻という形で愛する長男を失う悲劇を暗示するものだったのだろうか。夫を亡くして女手で四人の

子供を育てる苦労は相当なものであっただろう。博子は粉雪の舞う冬の真夜中、庭に出て一心に祈っている母の姿を見かけたことがあったという。

だがそんな母まつゑも神社に参拝したことがあった。市造が佐世保にいたとき、面会のためにそこへ向かったまつゑは、そのお守りをもっていれば弾に当たらないという噂をきいて南風神社に行っている。また東京の知人宅に行った際には靖国神社にも立ち寄り、「此処で待って居るから参ってお出で」といって博子だけに参拝をさせてきたという。博子は「靖国神社に参らねばならぬ身の上にだけは、なり度くない母の胸中を察して私は市造さんを死なせないでくださいとこれはキリスト教の神様に祈りました」と述べている。[45] 戦後になって、博子がまず平和を実感したのは、神戸で聖書と讃美歌集を手に教会へ急ぐ人たちの姿を見たときだったという。母まつゑは日本的キリスト教と称して神社参拝を自ら納得させていたというが、キリスト教は敵国思想、クリスチャンは国を売るのではないかと疑いの目で見る人もいたという。林家は村で一軒のクリスチャンではあったが、しかし良き信仰の友の往来もあり、その時代の中では恵まれた環境にあったはずであるとも述べている。市造自身にも信仰を共にする友達は少なくなかったようである。

旧制福岡高校のクラス雑誌『雁来紅』（一九四九年）で梅野正四郎は市造について次のように回想している。「君は外出時に短剣を忘れようとしたことはあっても、バイブルと携帯用の茶の湯道具とは忘れることがなかった。[46]」。「特攻隊編成の行われたのは三月初めであったろうか。それからの一ヶ月、君の生活は死を恐れることよりも主を畏れ、如何に生きるかと云う事に集中された。[47]」。まわりから見ていても市造の日々の振る舞いの中に信仰のあらわれがあることは明らかだったのであろう。本稿冒頭に引用した手紙は、この梅野氏の手をとおして母に届けられた。

秀村選三も同じ『雁来紅』に載せた文章の中で、大学時代に市造と「冬の夜『宗教哲学』の読書会をした頃」のことや、「戦に征かんとしての秋、南禅寺にいた彼を誘って若王子のキリスト教墓地を歩き、墓標の聖句を読んだ日」[48]のことなどを思い出している。秀村は佐世保では市造と同じ分隊に配属され、二人で手旗の練習もしたという。二人は後に土浦へ移ったが、そこで秀村は肺浸潤となり佐世保に帰されることになった。以後も何度か手紙のやり取りをしたが、顔をあわせたのはその土浦が最後となった。

秀村は次のようにも述べている。「お互いに前途の苦難を思うだけでも何か求めざるを得なかった。彼は私のポケットの聖書や内村鑑三の『後世への最大遺物』をずっと読んでいたが、二人ともたしかに真剣な生活を送らねばならぬが故に、異端を誇っていた私達も幼い日の信仰が蘇りつゝあったのではないだろうか」[49]。これは興味深い記述である。「異端を誇っていた私たち」というのが具体的にどのようなことであったか厳密にはわからないが、ひょっとすると当時の彼らは、さまざまな人生経験やあるいは新しく学んだ哲学から、少年時代からの素朴な信仰に対して懐疑的あるいは挑戦的な態度を示していたのかもしれない。だがそんな彼らの心の中でもこの困難な時代の中では、「幼い日の信仰が蘇りつゝ」あったのだ。秀村は、同じ文章の「後記」で次のように述べている。「一九四九年の新緑の頃、私は鹿屋に行った。彼が祖国を最後に飛び立った基地に立ちたく思い、また彼の手紙に書かれている小学校や小川のほとりを歩きたかったからであった。鹿屋航空隊の格納庫の無残な残骸をあとに、野里の方へ青々とした広い麦畠の中を歩いている時、私は「一粒の麦」を思い「復活の生命」が何の抵抗もなく受け入れられて、それは私のキリスト教信仰の原点の一つとなった」[50]。市造は特攻として与えられた死をまえに、母を思うことを通して自らの信仰の原点に立ち返ったが、秀村もまた戦後しばらくしてから市造の出撃した鹿屋にてあらためて「キリスト教信仰の原点」を発見し

たのである。

また市造とキルケゴールのかかわりについても彼が解説してくれている。「林君が元山進発前にキェルケゴールの『死に至る病』を読了したのは、恐らくその四年前に一度読んでいたからである。一九四一年、林君が高校一年の春休みに、私たち福高聖書研究会の数名は寮の亭々舎で合宿し、河野博範先生(九大宗教学助手、後、西南学院大学教授)の指導で、『死に至る病』を読んだ。先輩の永野羊之輔氏(九大哲学助手、後、広島大学教授)も参加された。私たちには難解な本であったが、イエス　キリストがこの世の病＝死を「この病は死に至らず」といわれたこと、「死に至る病」とは絶望であり、絶望は罪であることは深く心に残った」[51]。そして秀村氏は次のようにこの文章を締めくくっている。「高校以来、既成のものを破ろう、借りものを捨てようとして、異端を誇りとさえしていた私たちであったが、死を近くにして林君が「イエスさまもみこころのままになしたまえとお祈りになったのですね。私はこの頃毎日聖書をよんでいます。よんでいると、お母さんの近くに居る気持ちがするからです」と書いているのに、当時私も迷いながらも同じ思いでいただけに、林君も幼い日の単純で素朴な信仰に帰っていたと思われてならない」[52]。

このように秀村は、この同じ文章の中で二度も「異端を誇りとさえしていた私たち」と、最終的には「幼い日の単純で素朴な信仰に帰っ」たことについて言及している。彼のいう「異端」というのが具体的にどのような思想や態度をさしていたのかは想像するしかないが、おそらくは、それまでの自らの信仰を再度自らの頭で考え直そうという知的誠実さに基づいた思索であり、いわばティリッヒなどのいう「究極的関心」の枠内における佇まいだったのではないだろうか。だからこそ、市造は自らに与えられた死を前にして、「幼い日の単純で素朴な信仰」に帰ることができたのである。そしてそのような「信仰」は、市造の日記や手紙を見るかぎり、常に母の姿をとおして彼の内に保たれた

のだと思われる。

むすび

市造は京都帝大入学の際、本当は哲学を専攻したいと考えていた。しかし家族や将来のことを考えて、より実用的な学問として経済学を選んだ。彼が自らのキリスト教信仰と関連して具体的にどのような哲学に関心をもっていたのか詳しくは不明だが、きっと一〇代後半には信仰的あるいは哲学的探求の一部としての「懐疑」にも目覚めたのであろう。しかし軍隊生活と「特攻」の決定は、市造の信仰を再び素朴なものにゆり戻した。極限的な状況があらためてもたらした信仰の形は、市造においては、「すべては神のみむねと考え」ること、また「永遠に生きるものの道を辿」ることという、きわめて単純な神への信頼に他ならなかったといえるかもしれない。

市造は手紙の中で、母が「千人はなんぢの左にたふれ萬人はなんぢの右にたふる　されどその災害はなんぢに近づくことなからん」という聖句を書いてくれた国旗の話をしているが、この国旗には、実は姉博子もある言葉を書いていた。それは「彼等は涙の谷を過れども其処を多くの泉あるところとなす」という旧約聖書「詩篇」八四篇六節の言葉であった。そしてそれは市造の日記のタイトル「日なり楯なり」と同じ箇所なのである。博子は後に「姉弟が同じ詩篇八四篇から座右の銘を選んでいたのは幼い頃から聖書を読み合って重大な時に神により頼む死生観を培われたものと思います」[53]と回想している。

博子も市造の「私はこの頃毎日聖書をよんでいます。よんでいると、お母さんの近くに居る気持ちがするからです」

という手紙の一節をうけて、自分も結婚して母から離れて住むようになったとき、毎夜聖書を読んで、読んでいると母のもとに居た頃の安らぎが甦ってきたのを感じたという。彼女は弟の遺書を読んで、彼もまた同じ目で母を見ていたことを知って、母親の存在の大きさをあらためて認識したのである。

市造は「私は讃美歌をうたいながら敵艦につっこみます」と書いたのと同じ手紙の中で次のようにも書いている。

「私はお母さんに祈ってつっこみます。お母さんの祈りはいつも神様はみそなわして下さいますから」[54]

市造にとって、「神」「エス様」そして「讃美歌」は、信仰の要点であると同時に、母との最も確実な接点なのであった。母への愛情とキリスト教信仰は、少なくとも特攻隊員となって実際の出撃までの約一ヶ月半のあいだ、彼の中では常に同一の地平にあったのである。

姉博子は、幼い頃ともに愛読した『天路歴程』の主人公のように、市造もまた苦しい旅を続けて天国の門に辿り着いたのであろうと述べている。「私にはこの日記こそ市造さんの天路歴程であるように思われてなりません」[55]。『日なり楯なり』の「あとがき」における博子のこの言葉は、市造が手紙のなかで書いた、「市造は一足先に天国に参ります。天国に入れてもらえますかしら。お母さん祈ってください。お母さんが来られるところへ行かなくてはたまらないですから」という一文とも呼応しているように思われる。

注

1　加賀博子編『林市造遺稿集／日記・母への手紙　日なり楯なり』（櫂歌書房、平成七年）六四頁。以下『日なり楯なり』と略記する。

2　特攻に関しては極めて多くの本が出版されている。以下では一般の書店では手に入れにくいものとして次の二点を挙げておく。『魂のさけび――鹿屋航空基地資料館一〇周年記念誌――』（鹿屋航空基地資料館連絡協議会、平成一五年）、『特別攻撃隊』（特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会、平成一五年）。

3　森岡清美『若き特攻隊員と太平洋戦争――その手記と群像――』（吉川弘文館、平成七年）一〇九頁。

4　同書、一〇七―一七八頁を参照。

5　隊員名やその他のデータは、カミカゼ刊行委員会編『写真集カミカゼ　陸・海軍特別攻撃隊（下）』（ＫＫベストセラーズ、平成九年）や、原勝洋『真相・カミカゼ特攻――必死必中の３００日――』（ＫＫベストセラーズ、平成一六年）、特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会編『特別攻撃隊』（特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会、平成一五年）などを参照。

6　『写真集カミカゼ――陸・海軍特別攻撃隊――（下巻）』三〇頁、および、森岡清美、前掲書、一二九頁を参照。

7　市造が母に出した手紙のいくつかは、しばしば「鹿屋から母への手紙」と題されて紹介されている。述べたように彼は朝鮮の元山基地で特攻隊に加えられ、それから鹿児島県の鹿屋基地に移動してそこから手紙を書いているからである。海上自衛隊鹿屋航空基地資料館の展示をはじめ、多くの資料では彼の出撃基地は確かに「鹿屋」と記されている。だが『写真集カミカゼ――陸・海軍特別攻撃隊――（下）』では、彼の出撃基地は、鹿屋基地のすぐそばにある「串良」とされている。串良も鹿屋市内なので、記録上の「鹿屋」というのは地域としての「鹿屋」という意味なのか、それとも厳密に「鹿屋基地」を指しているのか、もし後者であったら「串良基地」と「鹿屋基地」のどちらの記録が正確であるのかなどは不明である。

8　大貫恵美子『ねじ曲げられた桜――美意識と軍国主義――』（岩波書店、平成一五年）二八九頁。森岡清美、前掲書、五頁。

9　保阪正康『『きけわだつみのこえ』の戦後史』（文春文庫、平成一四年）四〇頁。

10　編集をおこなったわだつみ会そのものも政治的に利用されがちなデリケートな組織であり、複雑な問題を抱えていた。保阪正康はわだつみ会について、「そのときどきにその時流に乗った知識人やそれを志向するグループが会に参加し、その精神をつまみぐいして去っていくという繰り返し」（保阪正康、前掲書、一七四―一七五頁）、あるいは「歴史を見つめる目と主観的思いいれを混同してしまった

錯誤の世代が、わだつみ会によって培養されているとの感さえしてくる」（同書、二三八頁）とも述べている。

11 詳しくは保阪正康、前掲書を参照。

12 『日なり楯なり』五八―五九頁。

13 この箇所については、保阪正康『「特攻」と日本人』（講談社現代新書、平成一七年）二六頁でも紹介されている。

14 湯川達典『特攻隊員林市造――ある遺書――』（櫂歌書房、平成五年）の六一頁以下に、市造の姉の博子がこの点について触れている手紙が掲載されている。

15 『日なり楯なり』五五頁。

16 Charles van Doren (ed.), *Letters to Mother*, Channel Press, 1959, p. 101.

17 『日なり楯なり』は市造の姉である加賀博子が編集をしたので、本稿ではこれをオリジナルと仮定した。しかし親族といえども高齢ゆえの写し間違いなども無いとは限らない。最終的にはおそらくご遺族のもとにあるであろう手紙の現物をみて確認するしかないが、本稿を執筆する段階ではそうした機会を得ることができなかった。またこの『日なり楯なり』では聖句や短歌を除いて現代仮名づかいにあらためられているが、湯川達典『特攻隊員林市造――ある遺書――』では旧仮名づかいのまま収録されている。

18 市造のテキストの扱われ方に関するその他の問題については、湯川達典、前掲書、四二―五四頁を参照。

19 『日なり楯なり』一六頁。

20 同書、二八頁。

21 同書、二五頁。

22 同書、二九頁。

23 同書、二九頁。

24 同書、三二頁。

25 同書、三五頁。

26 同書、三五頁。

27 同書、三六頁。

28 同書、三七頁。
29 同書、四三頁。
30 同書、一〇八頁。
31 キェルケゴール『死に至る病』（斎藤信治訳、岩波文庫、一九三九年）一八頁。
32 『日なり楯なり』五九頁。
33 同書、五九頁。
34 同書、二八頁。
35 同書、六四頁。
36 同書、六八頁。
37 同書、六八頁。
38 同書、七〇頁。
39 同書、七一頁。
40 大貫恵美子はそうした市造の悩める姿を「キリスト教と「天皇即国家への犠牲」のイデオロギーとを共存させようとする彼の葛藤」とも表現している（大貫恵美子、前掲書、三六五頁）。
41 『日なり楯なり』七三頁。
42 同書、七九頁。
43 同書、一九二頁。
44 同書、二〇二頁。
45 同書、二〇五頁。
46 同書、一三四頁。
47 同書、一三五頁。
48 同書、一三九頁。

49 同書、一四一頁。
50 同書、一四七頁。
51 同書、一四九頁。
52 同書、一五〇頁。
53 同署、一八三頁。
54 同書、六一頁。
55 同書、二〇九―二一〇頁。

本稿は平成一八年度文部科学省科学研究費補助金（課題番号一八七二〇〇一六）による研究成果の一部である。